



## 2010年を迎えて

首都大学東京 吉田博久

新年おめでとうございます。

会員の皆様には日頃より学会活動に支援を賜り御礼申し上げます。本年も宜しくお願いいたします。

21世紀の最初の10年が過ぎて、年ごとに世の中の状況が急速に進んでいることを実感されている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。特に2009年は「変化」という言葉がキーワードになった年でした。アメリカ大統領が“Change! Yes we can”のスローガンで交代し、日本でも与党が交代しました。リーマンショック以降に経済状況が大きく変わり、企業活動だけでなく大学にも学生の就職状況など様々な影響が表れています。事業仕分けでは、公的な研究費を使うことへの研究者の説明責任が求められることが鮮明になり、大学を取り巻く環境はさらに変化しています。

法人化以降、大学はいろいろな面で変化を求められ、良くも悪しくも新しい形態になってきました。任期制によって人の交流が進んだ半面、若手が腰を落着けた研究をしにくくなっています。そのため、経験が必要な研究手法は敬遠されて受け継ぐ人が少なくなり、多くの研究室で貴重な伝統が消えてしまうことが懸念されています。一方で、研究の枠組みが転換して多くの研究機関や企業との交流が増え、異なる研究文化と関わることで思いもよらない新しい研究手法が生まれることもあります。

「変」の旧字体である「變」は、「打って別のものになる」の意味を持ちます。動物の皮を打って革にすることが思い浮かびますが、「打つ」にはもう少し広い意味があるそうです。物質が刺激によって転移することも「變」に含まれるでしょう。相が変化しても物質は同じであるように、法人化や事業仕分けによって大学の形態が変化しても、研究と教育という本質に変わりはありません。普遍的な本質を変えることなく、社会の変化に対応できる大学になることが求められています。

熱測定討論会は1965年からスタートして昨年で45回を

迎えました。この間、会員数は1992年の921名をピークに年々減少して、現在はピーク時の2/3になっています。憂慮すべき点は会員の年齢構成が逆三角型の不安定な形状になっていることです。定常的な学会活動を行うためにはこれを長方形型にしない限りはなりません。そのためには、学生会員として活躍した方が正会員として引き続き研究活動を行っていただく、さらに別の分野の方に熱測定にも関心をもってもらうための環境作りをする必要があります。本学会では若手の優れた研究者を奨励賞で表彰しています。この表彰を刺激としてさらに優れた研究を目指していただきたいと願っています。



本学会は「熱測定（熱量測定・熱分析・その他の熱力学諸量と熱物性測定）およびこれと密接に関連した科学に興味をもつ研究者相互の連絡を通じ、熱測定に関する科学および技術の研究と応用を促進すること」を目的に設立されました。この本学会の本質に立ち返り、異なる研究文化を持つ熱量測定、熱分析、熱物性測定の研究者の交流をこれまで以上に進めたいと考えています。その交流は新たな科学の理解と新しい測定技術をもたらす、さらに新たな研究分野を生み出し、学会活動を活発にする原動力になるでしょう。若手の会の活動はその交流の良い機会になります。

本年はICCT-2010が開催されます。海外や他の研究分野からの参加者が大勢見込まれています。私も大阪で開催されたICCT-96での出会いが海外との共同研究をスタートさせる機会になりました。ICCT-2010で多くの研究交流が生まれることを期待しています。若い人にはICCT-2010に参加して多くの刺激を受けたいと考えています。

本年も学会として、熱測定の魅力を他の分野の方に伝える活動に積極的に取り組みたいと考えています。会員の皆様にはより一層のご支援をお願いいたします。